

御経塚遺跡出土打製石斧についての考察 - 使用痕の観察から -

堀敬人

打製石斧は縄文時代を代表する石器であり、当時の生産活動を考える上で最も重要な石器の一つとして位置づけられている。この打製石斧については多くの研究者による成果が残されており、打製石斧が基本的に「土を掘る」ための道具、即ち「土掘り具」であったとされるのが一般的である。

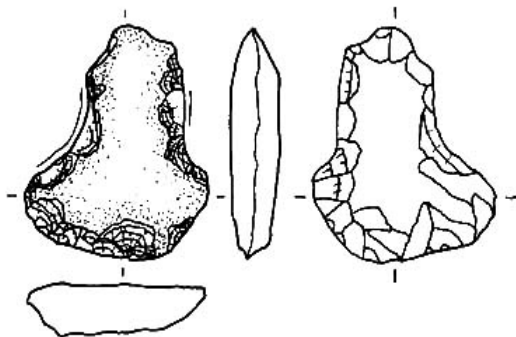
しかし、例えば打製石斧の中に木を伐採するために使用されたものがあったのかどうか、或いは土を掘る際に鍬のような着柄であったのか、未だに結論が出ていない問題も残されている。

そこで、打製石斧の出土数が石川県内で最多の、野々市町御経塚遺跡の打製石斧を実際に観察し、特に使用痕のあり方に注目して打製石斧がどのような性格の道具であったのかについて考察した。

御経塚遺跡出土の打製石斧のうち、実際に観察できたのは61点であった。報告書に基づきながら平面形態と大きさについて分析し、さらに使用痕を一点ずつ観察した。平面形態を「短冊形」「撥形」「分銅形」の3形態に分類し、実測して得られた最大長・最大幅・厚さの数値とあわせて形態ごとの差について分析してみた。分

銅形はある程度大きさもまとまっており、製作上に意図が感じられるが、短冊形と撥形においては明確な作りわけは見られなかった。これは、短冊形と撥形の上に多くの中間形が存在するためである。

使用痕の観察において、柄に装着された際に付着する擦痕は殆ど見られなかったが、刃部が対象物と接する際に付く磨痕のあり方から、今回観察した打製石斧が基本的に柄を付けて使用されたものであることが分かった。さらに、柄に対して石斧の刃が平行するか、直交するかによって磨痕の付き方が違うことに注目し、柄に対して石斧の刃が直交する着柄であったことを明らかにした。



撥形打製石斧
(御経塚遺跡出土)

また、磨痕の付き方の特徴が各形態を通して同じであることから、打製石斧が全ての形態において着柄され、同じように使用されたことが分かった。特に分銅形は、その形態からこれまで両端を刃部とする「両頭のオノ」であるとされたり、台湾の民俗例から着柄されずに根切りや除草に使われたと考えられていたりしていた。今回の観察で、刃部は一端に限られており、また着柄の仕方がオノとは異なることから「両頭のオノ」ではあり得ず、台湾の民俗例についても、使用痕を見る限り着柄されていたと考えた方が良さそうである。

これらのことから、打製石斧の持つ形態の違いは直接用途の違いを表すわけではなく、どの形態においてもその使用目的は「土を掘る」ことであった。竪穴や柱穴の掘削、植物質食料の掘り出しなど、打製石斧は平面形態に限定されない、多様な用途を持っていたと考えられる。